

イブラヒム・ミュテフェッリカ 著作本とその書誌

ー アラビア文字の印刷メディアと
コンピュータメディア ー

照井 菜穂子

キリスト教徒の子としてハンガリーに生まれたイブラヒム・ミュテフェッリカ (İbrahim Müteferrika, ca. 1674-1745) が、なぜ故国を去ってオスマン帝国へと赴きその地でイスラームに改宗したのか、その事情については諸説がある。オスマン帝国へ出仕するに至った経緯も知られていない。オスマン帝国の外交官となった彼は対オーストリア、ロシア交渉に活躍した。また内政面では帝国の運営体制がいかに時代遅れであるかを指摘し、その改善の必要性を訴えつづけた。1731年に執筆した *Uşûl al-ḥikam fî niẓâm al-umam* 『諸国統治に関する科学的方法』では、ヨーロッパにおけるオスマン帝国の影響力衰退の原因を説き、行政・軍事システムの近代化を提唱した。オスマン・トルコ語によるその本の1コピーを現在京都外大付属図書館が所蔵しているのであるが、その目録を図書館に新しく導入されたアラビア文字対応の目録作成ソフトで作成することになったのは3ヶ月前、2004年7月初旬のことだった。

NACSIS Webcatをすでにご存じの方も多だろう。全国の大学図書館等が所蔵する資料の総合目録データベースをインターネット上で検索するシステムである。しかし、このデータベースを、国立情報学研究所 (NII) の目録システム (NACSIS-CAT) を通じて参加図書館が共同作成していることはあまり知られていない。本学の図書館もそうした作成館のうちの一つであり、アラビア文字原綴りを取り入れた書誌データが2003年秋より運用開始となるのにあわせて、これに対応できるよう準備を重ねてきた。アラビア文字で初めて作成した書誌をパソコンの画面で見たときは、ちょっとした感動だった。アラビア文字のコンピュータメディアに触れた瞬間である。そしてここに巡り合わせの不思議を感じ

じるのだが、今回の著者ミュテフェッリカは、実は、外交官としてよりも、アラビア文字による印刷メディア、つまり活版印刷術の導入者として歴史に名を残している人物であった。

西欧の活版印刷術が導入されるまで、イスラーム世界では独自の印刷技術は発展を見ず、書物はもっぱら手稿本として流布していた。活版印刷術はまず、キリスト教徒の国土回復運動 (レコンキスタ) 完了後にイベリア半島から追放されたため移住してきたユダヤ教徒によりオスマン帝国にもたらされ、勅許を得てヘブライ文字の印刷所が開かれた (1493年)。それに続くようにアルメニア教会派 (1562年)、ギリシア正教徒 (1646年) が各自の文字で活版印刷を開始した。これに対して、アラビア文字による活版印刷はかなりの遅れをとる。宗教界からの反発があったと言われるが、写本業で生計を立てている方面からの経済的理由による抵抗もまた強かったようである。1726年、ミュテフェッリカは協力者の助力を得て、印刷所と書物の効用を説いた意見書を提出。翌1727年に宗教書を除くという条件つきながら勅許を受け、イスタンブルにアラビア文字の印刷所を開いた。しかしこの条件も、印刷術の導入を一連の近代化への改革路線の延長上にあるものととらえていた彼にとっては、ほとんどマイナスとはならなかっただろう。辞書、文法書、歴史書、地理書、科学技術書などの非宗教的な書籍を次々と印刷・刊行していった彼の姿を思い描くと、逆にこの条件が彼の望む近代化への追い風になったようにさえ思える。

それぞれの時代のメディアへ取り入れられたアラビア文字。刷り上ったアラビア文字を紙面上に初めて見たとき、彼はいったい何を考えたか。そして現代のコンピュータ画面に映るアラビア文字をもし見ることがあったなら、彼は何を思うか。叶わぬことだが、彼の口から聞いてみたいと思った。

てるい なおこ (情報サービス課)